MINAMI KYUSYU NO JOKAKU
南九州の城郭
第14号
南九州城郭談話会報
平成12（2000）年5月10日発行

中世佐敷城を探る（前編）

鶴　嶋　俊　彦

1　はじめに

佐敷城は南北朝時代から肥後国芦北郡の拠点的な城郭として見え，戦国時代には相良氏の芦北支配の拠点ともなった城郭であり，史料にも多く登場している。天正15年，豊臣秀吉の九州動座（島津征服）の後，領主となった加藤清正は石垣造りの佐敷城を築城した。『肥後国誌』では「佐敷城迹」の条で「花岡城トモ云其始ヲ不知，建武二年村上伯耆守顕興入道紹覚　当国ニ下リ八代古麓ニ在城シ一族上神出羽守重光ヲシテ当城ヲ守ラシム應永二十七年菊池肥後守兼朝当所ニ住シ六十四歳ニテ卒ス」とあり，また，「永禄五年薩州島津家臣梅北宮内左衛門当国ニ撃入リ（中略）佐敷太郎重宗カ城ヲ責落シ重宗討死ス」とあり，「天正ノ始ヨリ相良家ノ領分トナリ此時家臣西肥前守久遠在城ス」という説を載せる。補注の『事蹟通考編年考徴』では佐敷城ハ佐敷町西ノ山ニアリ花岡城トモ云名和家領ノ時ハ上神出羽守重光ヲシテ城代タラシム相良領ニハ永禄ノ比佐敷太郎武門天正ノ頃ハ西肥前守久城代タリ加藤領トナリ天正十七年八月長尾安右衛門善政城代トナリ暫ニシテ加藤重次ニ命シ田ノ浦城ヲ畳ミ善政ノ代テ佐敷城ノ守将トス」という説をあげる。つまり，近世において中世以来の佐敷城は佐敷町西側の加藤氏築城の「花岡城」と同所と考えられている。

一方，同書には「東ノ城迹」として，「栫村ノ山上ニアリ城主ハ相良家臣東新左衛門同藤左衛門ト云　按ニ花岡城ニ西肥前守在城ノ以前ナルヤ年代不分明　栫村ハ城ノ栫ニシテ城主常ニハ城ニ不居　栫ニ居テ事アルノ時ハ城ニ籠ルト云　亦家士等モ栫ニ在居セリト云　城主藤左衛門カ一子ニ乙千代丸アリ　其館跡乙千屋村ナリト云」とあり，「花岡城」以前の佐敷城である可能性も示唆している。以上の２城は明和２年（1772）の『肥後国誌』の付図である「芦北郡佐敷之図」に，それぞれ「花岡ノ古城跡」，「古城山」として記載されている。

上記の花岡にある城跡を中世以来の佐敷城とする近世編纂物の説は，現代も『芦北町誌』『熊本県の中世城跡』『日本城郭大系』などに基本的に踏襲され定説となっていた。しかし，平成５年から発掘調査が実施され元和の一国一城令による城破却の様子が検出され話題となった佐敷花岡城（県指定史跡名「佐敷城跡」）の報告書（「佐敷花岡城跡」Ⅰ　芦北町教育委員会　1995）では，根拠を明示していないものの，南北朝時代以降の記録に見える中世の「佐敷城」は地元で「じょうやま」と呼ぶ佐敷東

の城跡に推定し，初めて定説への疑問が提出された。筆者も発掘調査を見学し，中世城としての遺構が希薄であることから，同じ疑問を抱いていたが，加藤氏築城の佐敷城が発掘調査で全貌が解明されつつある現在，それと対照的に中世の佐敷城の実態は不明なままにあるのが現状であった。

今回，佐敷周辺に確認されている「佐敷城」「佐敷東の城」「兼丸城」の三箇所の城跡の踏査の結果，残存遺構，史料，歴史的環境から中世期において人吉城・八代城とともに相良氏の領国経営の拠点となった史料に見える中世の「佐敷城」の遺跡地は，江戸時代に「古城山」と呼ばれた「佐敷東の城」と考えるに至った。ここでは，その概要を報告し，大方のご指導とご批判をお願いしたい。

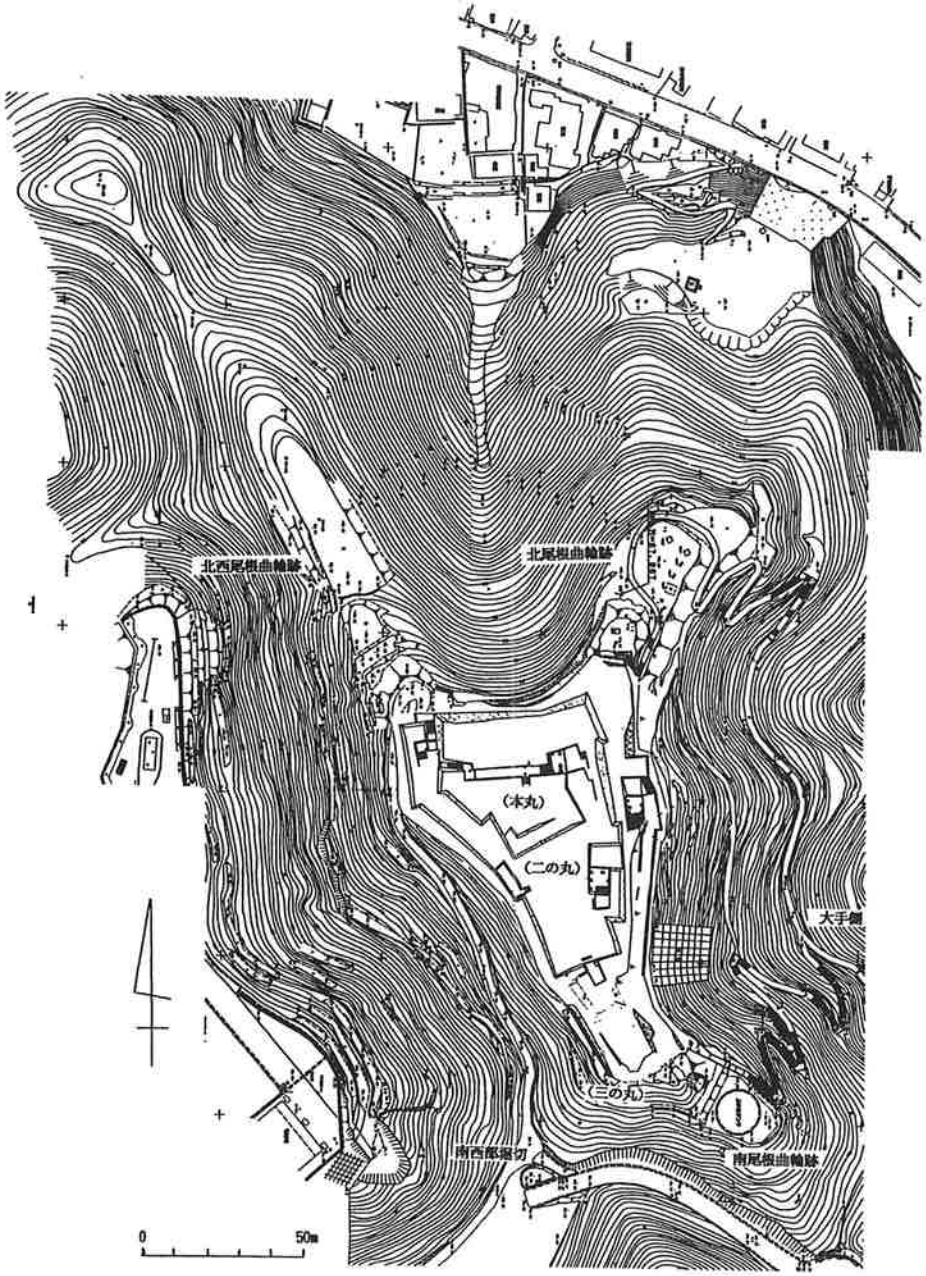
2　史料に見える佐敷城

南北朝時代後期の至徳元年（1384）11月に南朝方に帰順した相良氏が島津氏と共に八代堺の北朝方の拠点の二見陣を攻撃し，翌年1月10日に北朝方渋谷氏は佐敷に退き「佐敷之城」に籠城したとあるのが佐敷城の史料上での初見である。これ以前，永和3年（1377）の南九州の国人による一揆契約では芦北の領主および代官とともに「佐敷代備前守国顕」の名が見え，また，至徳元年閏九月に芦北二見での北朝方の犬追物には島津・相良・渋谷・天草などの国人に混じって芦北衆の一人「佐敷越中守」が参加しており，芦北七浦衆の一人である佐敷氏が城主であったと考えられる。

寛正元年（1460），肥後国守護の菊池氏との接近によって芦北郡を得た相良氏は，直ぐに相良又三郎・吉牟田新三郎に二見・日奈久を与え，名和氏支配の八代との堺の警固としている。相良氏は八代支配の願望が強く，為続は文明3年（1471）以来度々八代城を襲い，文明16年（1484）ついに八代城入城を果たす。この間，為続は佐敷で同盟関係の天草上津浦邦種に参会しており，佐敷が八代攻撃の後方拠点となっていたらしい。また，永正元年（1504）に再度八代城入城を果たした相良氏は八代城を本拠とし，天正9年（1581）の島津氏による降伏まで相良氏の支配が続く。この間に佐敷は『八代日記』に数多く登場する。

大永5年から享禄3年の相良氏の内紛の中で，相良氏第16代となる長唯（のち義滋）は享禄元年（1528）田浦を攻撃，翌2年佐敷城を攻撃して落城させ，続いて湯浦城の地頭犬童又三郎・美作父子を津奈木に追い，さらに津奈木城を陥落させて犬童父子とその支持者津奈木一族を一掃した。長唯はこの内乱を経た享禄3年3月には相良家奉行を通じて芦北衆に郡堺の警固，城誘（城の築城・整備）の依頼を指示し，天文3年（1534）に八代本城の鷹峯城の築城を行い，球磨・八代・芦北3郡支配の強化を図っている。この時期，佐敷では天文2年に佐敷諏訪神社が白木から相良氏によって遷宮されたと伝わり（『肥後国誌』），また同年間には「佐敷東の城」の麓の東泉寺が人吉永国寺の僧台庵によって開基されたと伝わっており（『肥後国誌』），八代城同様，この時期に佐敷城の築城・整備が図られた可能性が高い。史料では，佐敷は相良家当主が各地の大名や使者との参会を行う外交上の場所や，3郡の老者・年行などの重臣の会談の場所として多く利用されている。それは佐敷の位置が人吉と八代の中間にあり，また，八代の徳渕と同様に城の外港をもち海陸交通の結節点であったからである。佐敷では来客の宿として「佐敷八町」「杉本坊」が見え，町家である「佐敷之市」があった。「佐敷八町」「佐敷之市」は佐敷城下町のことと考えられる。

永禄後期から天正前期，相良氏と島津氏は真幸・大口・宝河内などでの合戦と和睦を繰り返した緊張時期である。天正6年（1578）島津氏は日向耳川の合戦で大友軍を破り，これを契機に本格的な肥後への侵攻を行う。天



第１図　佐敷城（佐敷花岡城）地形図

作図：鶴嶋俊彦

第２図　兼丸城跡縄張図

正７年には相良義陽も佐敷城に陣を置いて島津に対抗したが，天正８年には水俣城が総攻撃によって落城し，翌９年に義陽は島津氏に降伏し，相良氏の八代・芦北支配は終わりを遂げる。島津氏は佐敷地頭に宮原景種を配して佐敷衆を統括させた。相良氏は島津氏の肥後制圧，豊後侵攻の先兵となり苦渋を味わうが，天正15年に秀吉が九州に動座するに及んで島津氏は秀吉の軍門に下り，相良氏は球磨郡のみを安堵されている。同年の佐々成政の統治下の佐敷の様子は不明だが，肥後国人一揆の時には相良氏が一時占拠したと伝え，佐々の改易後の天正16年には佐敷は加藤清正の領地となり，城代に加藤重次が置かれた。佐敷城が本格的な織豊系の石垣作りの城郭として新規に築城が開始されるのは，恐らく肥後の他の城郭と同様に清正知行後の天正末期以降のことと思われる。

その後，文禄元年に朝鮮出兵した城代の留守中に島津家臣の梅北国兼が佐敷城を襲い占拠する事件があり，慶長５年の関が原戦の際には宇土城の小西の救援に向かった島津軍が佐敷城を囲んで攻撃し，相良軍もこれに参加したという。さらに，慶長16年には城代が加藤与左衛門に替わり，『肥後国誌』によれば元和元年の「一国一城令」では佐敷城の破却が行われたという。

３　「佐敷花岡城」の城郭遺構

平成５年から発掘調査が開始された佐敷花岡城は，一部石垣の存在が知られていたが，ほぼ全域におよぶ発掘調査の結果，標高87.5ｍの主郭部周辺の曲輪は石垣によって囲まれていた。３段からなる曲輪には本格的な石垣作りの升形虎口が連続して設けてあり，コンパクトながら典型的な織豊系城郭の特徴をもつ城郭であることが判明している。木島孝之氏は縄張りプランの視点から，この佐敷花岡城が中世の相良氏・島津氏の山城跡を改修したものであると主張している。すなわち，主郭をはじめとする中核部に限定して石垣が用いられおり，その周囲の三方の尾根筋に注目すると地形を素直に削平し連ねただけの広大な曲輪群が改修されることなく横たわっており，尾根筋の曲輪群は戦国期の相良氏・島津氏によるものと推定している（「近世初頭九州における支城の縄張り構造」『日本建築学会大会学術講演便概集』1994）。

４　「兼丸城」の城郭遺構

「佐敷東の城」と宮浦川の河谷平野を隔てた東側の大字八幡の「城山（じょうやま）」と呼称される舌状丘陵の南端の峯に位置し，南側に佐敷川の河谷平野を望む。東側の丘陵先端には江戸時代の兼丸村の鎮守である兼丸八幡神社が鎮座し，現在の大字名「八幡」の由来となっている。この城跡は『肥後国誌』には記載がなく，城主も不明である。城地の標高は最高62.8ｍで，ここに主郭が置かれる。主郭の野首部分に幅５ｍ，深さ３ｍの堀切があり（林道工事によって南側は破壊を受けている），さらに25ｍ北東の細尾根のくびれ部に幅２ｍ，深さ0.7ｍの浅い堀切があり，北方の丘陵との断絶を図っている。主郭は明瞭な削平がなく高さ１メートル弱程度の段差が５箇所に見られ，さらに南には深さ0.5ｍの浅い堀切状の溝が確認される。唯一主郭の南端に幅６ｍ程の削平が十分な帯曲輪が回る。この主郭には南側斜面の三箇所に腰曲輪が付き，北側斜面にも小土塁を伴う腰曲輪が付いている。主郭の西方には標高45ｍの舌状に張り出した尾根があり，その中間のくびれ部分に深さ2.5ｍの不明瞭な堀切がある。舌状尾根先端は階段状の地形が見られるが，栗の栽培などの農地として削平を受けた可能性があり，城域とするには疑問が残る。　（以下，次号へ）

研究ノート

石垣・石積みについて

高田　徹

南九州地域で石垣が使用される城郭と言えば，鹿児島県下では鹿児島城（鹿児島市），富隈城（隼人町），宮崎県下では高鍋城（高鍋町），延岡城（延岡市）等が思い浮かぶ。近年では，発掘調査により佐土原城（佐土原町）からも石垣造りの天守台が検出されたことが記憶に新しい。この他にも，筆者は存知しないが規模の程度に差こそあれ，「石垣」・「石積み」が認められる城郭は南九州地域でも少なからず存在するのではないかと思われる。

この我々が何気なく使用する「石垣」・「石積み」という用語も，近年の城郭研究上は少なからず揺れが生じている。

即ち，その代表的なものを挙げると，先ず北垣聰一郎氏は隅角部を有するものに限定して「石垣」の呼称を用いている。そして，隅角部の存在が不明な場合や，先の「石垣」を含んだ，石を積み上げたものの総体を「石積み」と広く呼称している。[1)]

これに対して，中井均氏は裏込石（栗石）を有するものを「石垣」，裏込石を有さないものを「石積み」としている。[2)] 氏によれば大量の裏込石を用いることで，「石垣」背後の水はけが良くなって背後からの崩壊を防がれ，石材自体を高く積み上げることが可能になったと説明されている。[3)]

木戸雅寿氏は「石垣」，「石積」，「石組」，「石列」に大きく分類した上で，「石垣」は上部に構造物が乗ることを前提とし，石材を一定の意志のもとに積み上げたもので，裏込石があるもの，と位置づけている。一方の「石積」は石材を組むという意識が低く，裏込石がないもの，としている。[4)]

このように，各研究者ごとで用語の使われ方に違いがあるのだが，当然ながら「石垣」と言えども基本的には石を積み上げたものであることに変わりはなく，[5)] 語義に従うならば「石垣」も含めた，大小様々の，石を積み上げられた状態を，広く「石積み」と呼ぶことは問題はないと思われる。要は，広く「石積み」の範疇には入るが，その中で特定の要素・条件を備えたものが「石垣」であり，その要素・条件・指標が研究者ごとで異なっている，と整理されるだろう。勿論，その要素・条件・指標の違いは，それぞれの研究対象・研究視点の違い等によるところが大きいと思われ，単純にどれが妥当な判断か等と言いうるようなものではない。北垣氏が石垣隅角部の算木積みに注目して，編年作業を行い，[6)] 中井氏が礎石建物・瓦とのセット関係から織豊系城郭における「石垣」の存在意義を論じた[7)]業績を想起するならば，この点容易に理解されるのではないか。

但し，従来の「石垣」呼称は大なり小なり畿内を中心とした織豊系城郭や近世城郭に認められるものを意識し，それに対置するものとして「石積み」を多くの場合位置づけてきたと思われる。そして，その場合の「石垣」は「石積み」よりも技術的にも構造的にも，抽んでた存在であることを前提に語られていた点も否定できないと考えられる。

近年では各地の発掘調査により，織豊系城郭・近世城郭以外でも，「石積み」を多用する城郭遺構の発見が相次いでいる。そして，それらの中には，規模・構造とも決して軽微とは言い難いものが含まれている。

一例を挙げるなら，三重県美杉村の北畠氏館跡からは，高さ約2.5 m，大きさが20～40 cm前後の石材を用いた「石積み」遺構が約15 m（推定80 m）の長さにわたって検出さ

れた。[8] この遺構は裏込め石を全く用いておらず，時期的にも，構造的にも，織豊系城郭で見られる「石垣」とは異質のものである。但し，外見的には「石垣」と呼称しても何らおかしくない構造であり，事実発掘担当者もこれを「石垣」と呼称している。

このような各地での，織豊系城郭・近世城郭以外の，様々な形態・構造の「石積み」検出事例等を鑑みる時，織豊系城郭・近世城郭と同様の要素・条件を備えるかどうかとは別の，異なった視点での分類・把握も求められているのではないかと考える。その際，「石垣」も含めた石を積み上げた状態が見られるものを全て「石積み」という呼称で統一化するという方法も，一つに考えられよう。

もっとも，筆者としては縄張り研究の立場から，これとは別に一案を提示してみたい。それは「石垣」の「垣」という字義に従って，一定度石が積み上げられた状態がみられ，それによってまとまったラインの形成（即ち，石による垣）が認められるものを「石垣」と呼称したいと思う。更に，ラインを城郭遺構に限定した上で，言い換えるのならば，それは「塁線」としても良いだろう。[9]

つまり，筆者は石を積み上げた結果，それが城郭全体の中で，防御性，隔絶性，遮断性といった機能面を中心に，それが「石垣」と呼びうるかどうかと判断したいと思うのである。この点，しばしば「石垣」の同義語として用いられる「イシカケ」（カケ＝崖）の語義にも注意しておくべきではないかと思われる。

もっともこの場合，どの程度のラインが認められるならば，「石垣」と呼びうるかという点が問題となる。この点については，抽象的ながら，ケースバイケースであり，その「石垣」が用いられている部分が，遺構全体の中で占めている程度・役割を評価した上で適宜判断する，と現状では考えておきたい。

このような私案がどれだけ妥当性を持つのかは心許ないし，まだまだ詰めるべき問題もあるとは思うが，「石垣」・「石積」の用語の問題に対して，些かでも再考する契機になれば幸いである。

註

1) 北垣聰一郎「伝統的石積み技法の成立とその変遷－穴太積みの意味するもの－」（橿原考古学研究所『考古学論攷』22，平成11年）。
2) 中井均「安土城前夜－主として寺院からみた石垣の系譜－」（織豊期城郭研究会 『織豊城郭』３，平成８年）。
3) 中井均「織豊系城郭の特質について－石垣・瓦・礎石建物－」（『織豊城郭』創刊号，平成６年）。
4) 木戸雅寿「近年石垣事情－考古学的石垣研究を目指して－」（『織豊城郭』４，平成９年）。
5) 但し，筆者の知る範囲では土塁の壁面等に板状の石材を貼り付けるように並べ，隣り合う石材間が接していないようなものもある（拙稿「三河における織豊期城郭の石垣・石積み－大給城を中心として－」『織豊城郭』３）。このような場合には厳密には石を積んでいるとは言い難いが，やや特異な事例と言えるであろう。
6) 北垣聰一郎『石垣普請』（法政大学出版会，昭和62年）。
7) 中井均「織豊系城郭の画期－礎石建物・瓦・石垣の出現－」（村田修三編『中世城郭研究論集』，新人物往来社，平成２年）。
8) 竹田憲治「北畠氏館跡の石垣」（『織豊城郭』５，平成10年）。
9) 敢えて言い換えたとしたのは，我々が今日「石垣」と呼称する対象は，何も城郭にみられるものに固定しておらず，様々な場に見られるものを指して呼称しているからである。これらについても，ラインの状態から「石垣」と呼びうるかどうかの判断が可能になると思われる。

事務局便り

募　集！

◎機関誌『南九州城郭研究』第2号の原稿募集

・仕　様　①Ａ４判たて書き本文10ポ
　　②１頁１行40字×40行＝1,600字
　　（400字詰原稿用紙４枚）

・〈目　次〉
1. 論　文 400字×50枚程度(図版･註を含む)
2. 研究ノート 400字×20枚程度(図版･註を含む)
3. 史料紹介 400字×5～20枚
4. 城郭関連文献一覧
5. 図書紹介・書評
6. お城拝見，その他　　締切６月10日

◆◆ 城郭研究フォーラム「延岡の五城」報告 ◆◆

城山ガイド・ボランティアの会　九　鬼　　勉

去る11月20日，国立歴史民俗博物館の千田嘉博氏を招いて，延岡市では初めての城郭研究フォーラム「延岡の五城」を開催し，翌日は中世城郭の「西階城」見学会を行った。

【基調講演】

まず初めに国立歴史民俗博物館の千田嘉博氏に「中世城郭から近世城郭へ」のテーマで話していただいた。

近世ヨーロッパの城を実際に見てきた千田氏は，それらの城の虎口の発達過程を日本の城と比較しながら，その類似点と相違点を解明，いかに中世城郭から近世城郭へ発展してきたのか身振り手振りを交えながら，およそ200名の聴衆に熱っぽく語った。

次に宮崎県教育委員会文化課の北郷泰道氏に「日向の城を読む」のテーマで話していただいた。

今度の宮崎県中近世城館緊急分布調査の陣頭指揮をとった北郷氏は，昭和60年の綾城の復元をきっかけに城跡の調査の必要性を痛感し，「日向の城を読む会」をつくり勉強を始めたが，その中で自分たちの足元を見据えた動きを見せたのが延岡だった。そして，その結果延岡城は，市の文化財指定を受けることができた。今後は国指定に向けて努力していきたいと，途中冗談を交えながらも淡々と語った。

【事例発表】

（総論）

「延岡城郭群の歴史的背景」というテーマで延岡東高校の甲斐典明氏に話していただいた。

延岡地方は，古代から中世にかけて土持氏が支配しており，その発生から滅亡までを可能な限りの史料を駆使して縦横無尽の解明を行った。

（各　論）

次に延岡城の五城について城郭調査の成果を踏まえ，それぞれの論者が解説を行った。

井上城については，宮崎県教育委員会の福田泰典氏が，**西階城**については城山ガイド・ボランティアの会の九鬼勉が，**松尾城・浦城水軍城**については，甲斐典明氏が，**延岡城**については，延岡市教育委員会の山田聡氏が，選地や縄張りについてスライドやプロジェクターを駆使して視覚に訴えたのが好評であった。

（パネル・トーキング）

最後に出演者全員によるパネル・トーキングを行い，延岡城郭群の重要性の再認識と延岡城を国指定に向けて努力することを誓った。

城郭フォーラム「延岡の五城」

城郭研究

「南郷城」を歩いて！（前編）

川　元　茂　信

1　位　置

吹上町は薩摩半島のほぼ中央にあり，「さつま湖」や「吹上浜」で知られている。東部は伊作峠で鹿児島の谷山と接し，西部は吹上浜で日本海に面しており，また，南部は金峰町，北部が日吉町と接している。町内でも北部に位置する永吉小学校の後方に宇都山があり，ここに「南郷城」が築かれている。学校西側道路の「南郷城碑」を過ぎ，さらに登ると主郭空堀につながる城山入口（第１図のＡ部）がある。

2　沿　革

桑波田氏は，平姓紀ノ大夫能成（よしなり）を始祖とする紀姓伊集院四郎時清の三男阿闍梨源知が伊集院桑羽田郷を領有してから桑波田を号としている。[2)6)]

平安時代，永吉の地は日置南郷と呼ばれ，島津庄の寄郡として郡司南郷万楊房桑波田覚弁が領地していた。[1)] 南郷城はこの桑波田万楊坊覚弁により築かれ，南北朝時代に拡張，強化がなされ，更に数代を経て16世紀に至り島津宗家14代忠兼（勝久）の家老となった桑波田讃岐守影元（観魚）時代に完成された中世城郭となったものと思われる。[3)5)]その後，伊作家島津忠良に与えられた日置南郷の地は，桑波田栄景（孫六）を城主として守られたが，天文２年（1533），対立していた薩州家島津実久に与し謀反した桑波田栄景は二度にわたり敗戦している。[4)] この堅固さを誇った「南郷城」は忠良の諜報，奇襲戦によって落城した。[7)8)]貴久，尚久支配を経て地頭が置かれるようになると麓が形成され「地頭仮屋」を中心に町は栄え「南郷城」はやがて廃城となる。

3　縄張り

「南郷城」の築城や規模の拡張に関する記録は資料としてみえないが，シラス台地特有の縄張り構造をみせている。シラス土壌の天然渓谷をうまく利用し，独立した丘陵に削平面・土塁・虎口・空堀を巧みに設け堅固な山城としている。丘陵は西より東に向かって長く，北方は断崖で守護川（もりご）があり，南方も断崖で永吉川が流れている。東方や南東尾根は竪堀で分断し「木戸口」が設けられている。また，吉利郷土史によると西から「野頸城」「二城」「三城」と連互し，五城が「根子城」六城が「高城」で最高地に位置し，七城が「東之城」で兵糧所及び厩屋等の在りし所と伝え大手口は西，搦手口は南にあり城内ヶ宇都に出るとしている。以上が南郷城の縄張り概略であるが，今回は「高城」「東之城」「根子城」について報告する。

4　入口～曲輪(監)

「高城（本丸）」は，南郷城略図（第１図）の曲輪Ｉであり，城域の中央部に位置する。Ａ地点の城山入口を北方に進むと，右側３～５ｍの高さに帯曲輪があり東方に土塁が設けられている。土塁上部は１～２ｍの幅があり北東の方に延び，やがて尾根状となり急傾斜ではあるが曲輪Ｉの南端部にたどり着く。しかし戦闘時の登坂は無理と思われる。また，帯曲輪はかなりの広さを有し南北25ｍ，東西７～10ｍあり入城者を上から見張ったり攻撃出来る。更に25ｍ程北進すると土居があり直進を防いでいる。右折は土居上部への空堀道で左折し進むと主郭部の堀底道となる。登り坂の左右は高さ20ｍ以上の絶壁，道幅は６～７ｍあるのだが足元が悪く歩きにくい，また数ヶ

所に崩落のあとが残り道は上下している。70m程登ると堀底道は狭くなり「喰違い土居」と思われる跡が残る虎口を入る（崩落による土砂か）。平場があり（杉が倒木）ここを左側へ曲輪Ⅱの裾を北進し，土居添いに北側から回り込むとBの所に虎口跡があり「根子城Ⅱ」へと入郭出来る。土居から西方は懸崖な浸食谷，北方は断崖で進入者を防いでおり，谷越しに北郷（吉利城）の情勢，動向を監視出来る。

（以下，次号へ）

註

1)『県史料旧記雑録』（内裏大番役支配注文），建久八年十二月廿四日（1197）の内裏大番薩摩国参観人名に南郷万楊坊の名が登場する。また，別書「国人交名」には日置南郷桑波田万楊房覚弁とある。

2)『伊集院郷土史』，嘉元二年（1302）三月二日の譲状で，紀ノ景氏が先祖相伝の桑波田郷を子息桑波田四郎三郎に譲渡している。

3)『御家五代他家古城主来由記』写本（薩隅日古城主由来記），正徳六年（1716）出版，「南郷永吉の地」南郷万楊房覚弁　略・・太守勝久公の家老桑波田讃岐守景元入道観魚が先祖也。

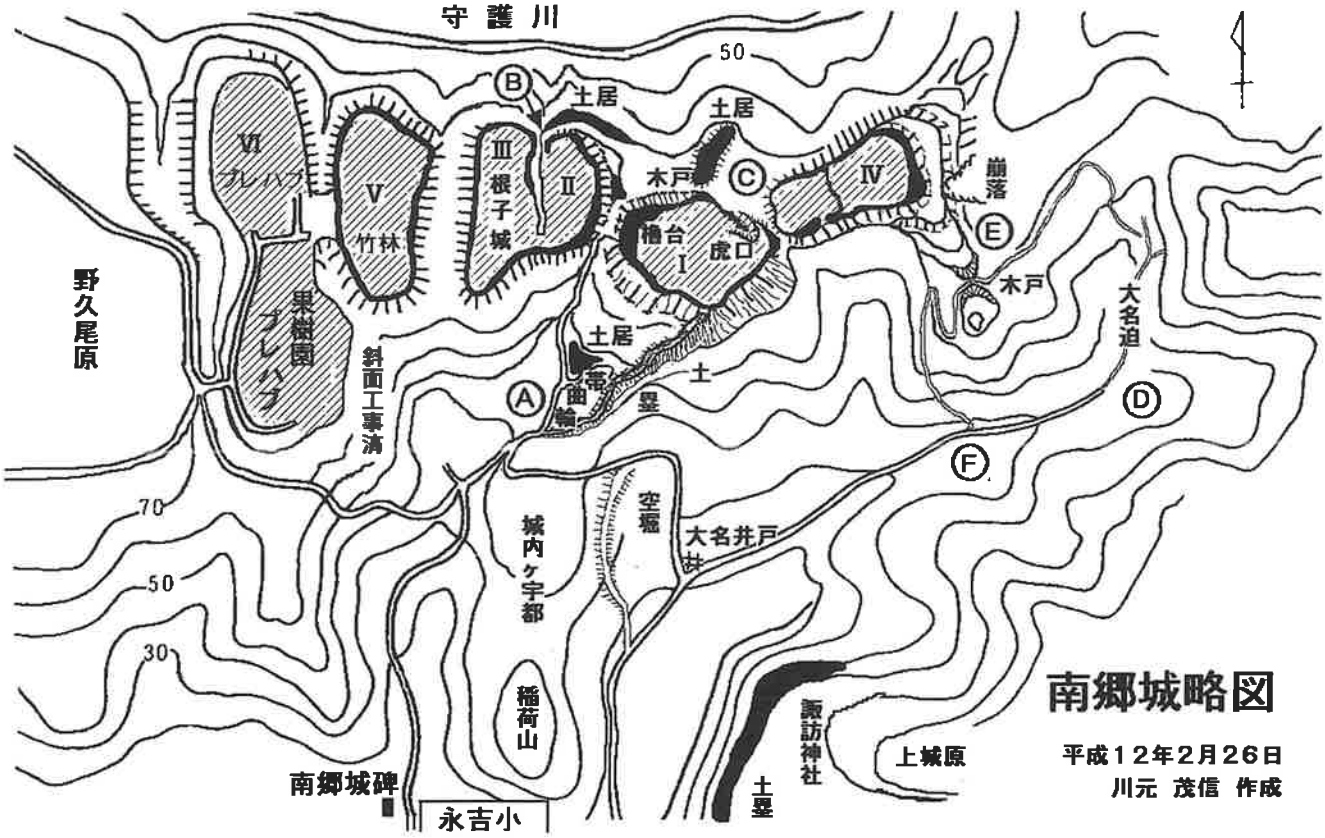
4)『西藩野史』新薩藩業書（二）巻之九　166頁～171頁

5)『薩隅日地理纂考』四之巻 125頁 薩摩国の永吉郷「南郷城」より。

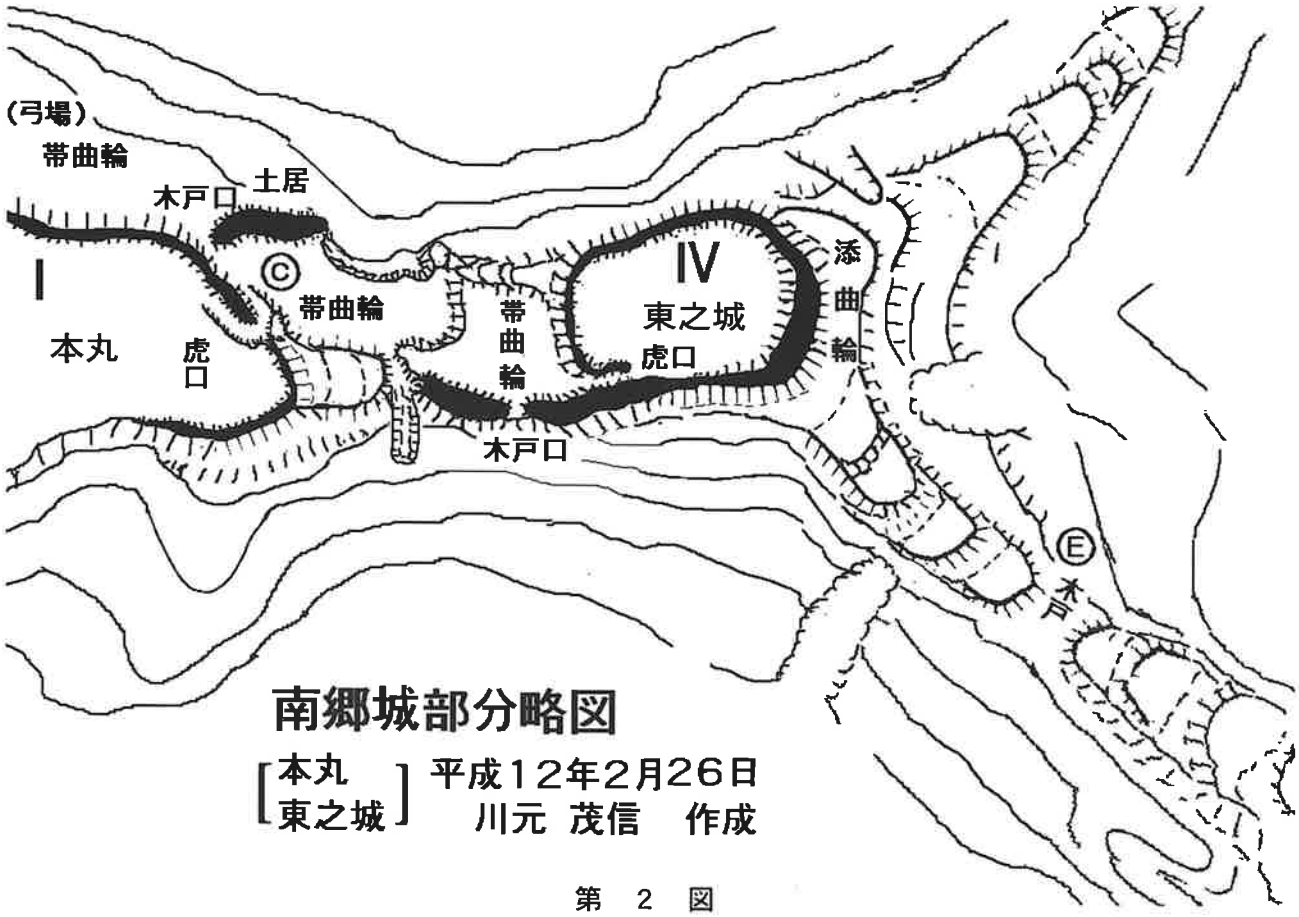
6)吹上町歴史資料館掲示　桑波田氏歴代系図より。

7)『常楽院沿革史』124頁，天文二癸巳（みずのとみ）の春薩州日置郡南郷城主桑波田孫六貴久公の仇敵島津実久に興みし・・・略・・・番人謀れたりとは知らず更に怪しむ所なし。

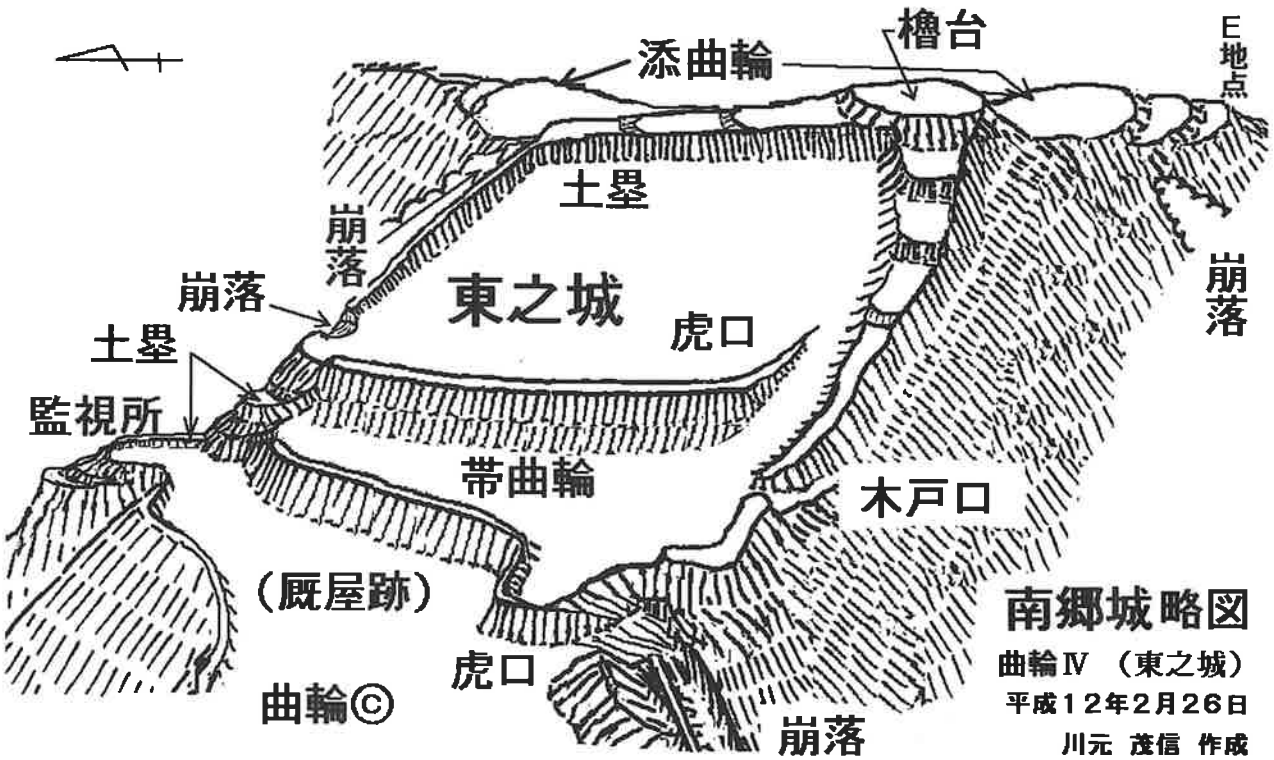
8)『吹上郷土史』中巻 第三節 伊作城の十三年，（二）南郷及日置の征服 30頁



第　1　図


(弓場)
帯曲輪
木戸口
土居
Ⅰ
Ⓒ
帯曲輪
本丸
虎口
帯曲輪
Ⅳ
東之城
虎口
添曲輪
木戸口
Ⓔ
木戸
南郷城部分略図
[本丸 東之城]
平成12年2月26日
川元 茂信 作成

第 2 図


添曲輪
櫓台
E地点
土塁
崩落
崩落
東之城
虎口
崩落
土塁
監視所
帯曲輪
木戸口
(厩屋跡)
虎口
曲輪Ⓒ
崩落
南郷城略図
曲輪Ⅳ (東之城)
平成12年2月26日
川元 茂信 作成

第 3 図

◆◆ 第14回見学会・例会・総会報告 ◆◆

下　鶴　　弘

◎見　学　会

2月20日(日)，心配された雨もあがり，集合場所の古麓町春光寺駐車場には，早くから参加者が集まった。見学会は予定通り午前10時から始まり，44名の参加者を数えた。

古麓城の案内は八代市教育委員会の沢田氏と人吉市の鶴嶋会員にお願いした。特に沢田氏は幼少の頃より，この古麓城を遊び場として育ったということで，最適の人であった。

古麓城は，中世の八代城として小西行長の麦島城築城までこの一帯の拠点であったという。(その歴史的経緯については，前号鶴嶋氏の説明を参照していただきたい。)

春光寺を出発した一行は，急斜面の小径を新城遺構へ向かった。大変な急勾配で，参加者一同，十二分に攻め手の労苦が偲ばれたことと思う。古麓城は南から飯盛山城郭遺構・新城城郭遺構・大平山城郭遺構の三つの城郭群からなり，今回は時間の関係もあり，このうち最も大きな新城城郭遺構を探索した。

展望所から見た広大な景色は，参加者へ肥沃な八代平野と球磨川水運の隆盛を彷彿させ，この城の重要性を雄弁に物語っているように思われた。一行は恒例の記念写真撮影後，北西の稲荷神社参道を利用して下山した。

次の見学地である麦島城は，八代市教育委員会の山内氏に案内していただいた。

麦島城は小西行長が天正16(1588)年に球磨川の中の島に築城された平城である。幸いにして，麦島城の中心部を発掘中であり，建物跡の礎石とその基礎部分や地下式の石組，出土瓦など貴重な報告を聞くことができた。織豊期の城跡として今後の調査が大変楽しみである。

案内者や市文化課の方々には，事前の準備や当日の受け入れに大変お世話になった。ここで改めて感謝の意を記しておきたい。

◎例　　会

午後から会場を八代市厚生会館に変えて，例会と総会が行われ，75名の参加があった。三木会長挨拶の後，例会は新東晃一会員の司会により下記順番に行われた

1. 高野　茂「八代支配の変遷－特に相良支配の八代を中心に－」豊富な文献資料から戦国期の八代像を浮かび上がらせた。「八代は相良氏の城下町と八代町衆の港町と妙見信仰を主体とした門前町がミックスされた肥後最大の都市であった。」
2. 鶴嶋俊彦「中世の八代城（古麓城)」会報の記述に加え，文献を渉猟して古麓城関係年表を作成。この年表には文献に散見する関連用語を丹念に調べて記載する。今後の現地調査や遺構群復元に必須の資料となろう。
3. 原田聡明「近世の八代城－肥後松江城の特徴変遷について－」縄張りについて，熊本県立図書館蔵「八代町絵図」と正保頃の内閣文庫蔵「八代城廻絵図」を元に詳細な説明があった。また，総曲輪の風水思想による解釈は興味深かった。
4. 各地の城郭調査の現状

○熊本県内の状況　　報告者　鶴嶋会員

宇土城や佐敷城の詳細な現状報告がなされたが，紙数の関係で割愛させていただく。

○鹿児島県内の状況　　報告者　上田会員

串木野城跡・知覧城跡・建昌城跡など

◎第4回総会

総会の議長は米永会員にお願いした。

議案1．平成11年事業報告と12年事業計画について　　(上田事務局長)

議案2．平成11年会計報告（福永幹事）　↘

議案３．機関誌２号刊行について（下鶴）

議案１～３とも特に大きな議論もなく可決された。機関誌の刊行は，会員には大変好評であり，ほとんどの参加者へ購入して頂いた。

・平成11年事業報告

(1)１月10日　第10回見学会・例会，鹿児島県志布志町
(2)３月７日　第11回見学会，大分県三重町
(3)６月27日　第12回見学会・例会・第３回総会，宮崎県都城市
(4)12月11･12日　第13回見学会・例会，鹿児島県串木野市・吹上町
(5)５月20日　会報『南九州の城郭』第10号刊行
(6)９月20日　会報『南九州の城郭』第11号刊行
(7)12月５日　会報『南九州の城郭』第12号刊行
(8)６月１日　機関誌『南九州城郭研究』創刊号刊行

【新入会員】　（５月１日現在）

城　一久　中園　晃　中村　祐一
西本　誠司　野崎　悦　野崎　敏
堀澤　重年　山野　純作

第15回　見学会･例会 案内

日　時　平成12年５月14日(日) 10:00～15:30
集合場所　高山町文化センター（鹿児島県高山町）
交通案内　・ＪＲ日南線志布志駅より20㎞
・国道220号線緑ヶ丘交差点より南下５㎞
会　順　(1)　見学会
10:00　集　合
10:10　高山城跡見学
12:00　昼　食（文化センター）
※希望者は弁当を受付けます。
(2)　例　会
13:00　研究発表･質疑応答
①　肝属氏と高山城について
②　高山城跡について
③　群郭式城郭について
④　日輪城跡の遺構・遺物
⑤　各地の城館調査
15:30　解　散

・平成12年事業計画

(1)２月20日　第14回見学会・例会・第４回総会，熊本県八代市
(2)５月14日　第15回見学会・例会，鹿児島県高山町
(3)９月中旬　第16回見学会・例会，宮崎県
(4)12月中旬　第17回見学会・例会
(5)２月10日　会報『南九州の城郭』第13号刊行
(6)５月10日　会報『南九州の城郭』第14号刊行
(7)９月上旬　会報『南九州の城郭』第15号
(8)12月上旬　会報『南九州の城郭』第16号
(9)７月下旬　機関誌『南九州城郭研究』第２号

編集後記

◆第14号をお届け致します。今回は，会員の方々に直接呼びかけたこともあり，原稿の集まりも良く，また，いつもより多くの方々から頂戴いたしました。感謝申し上げます。そこで，今号は４頁の増となり，12頁で編集してみました。
◆今号には，鶴嶋俊彦氏による中世の佐敷城についての論考を頂きました。前号に引き続いての氏の精力的な調査と多筆ぶりに感謝致します。高田徹氏の，石垣という用語についての論考は，一般的に使われている定義に近いものを提唱しており，私も共感を覚えました。
◆九鬼勉氏からは，城郭研究フォーラムの報告を頂きました。市民と行政を巻き込み，延岡城の国指定化を目指して活動しておられる方々の情熱には，元気づけられる思いです。本会のホームページを開いている川元茂信氏から，愛情溢れる城郭散歩をいただきました。地元の城郭をじっくり観察している証です。次号にも続編を掲載する予定です。
◆次号の会報発行は，９月上旬の予定です。原稿は下記まで。　(Shige)

重久淳一 〒899-5106 姶良郡隼人町内山田1138-5

南九州の城郭　第14号

発行所　鹿児島県川辺郡知覧町郡17,880
ミュージアム知覧内　上田耕 気付
南九州城郭談話会
(振替口座　02040－6－37850)
発行者　三　木　　靖
編集者　重　久　淳　一
印刷所　㈱ト ラ イ 社
入会金500円　年会費1,000円